あとがき

小関　素明

ここに『加藤周一現代思想研究センター報告』の準備号として第０号を刊行する運びとなった。すべてのお名前を列記しきれないが、刊行に尽力された鷲巣力、加國尚志、半田侑子をはじめとした関係者の方々、力作論稿を寄稿いただいた学内外の諸先生には感謝の言葉しかない。

日本において近代以降の個人（日本人）の名前を冠した「〇〇研究」、「〇〇報告」と標題のついた雑誌は、筆者の知るかぎり福沢諭吉、吉野作造、丸山真男、加藤周一ぐらいのものではなかろうか。あるいは文学者などではこれ以外にも存在するかもしれないが、それでも両手で数えられる位ではあるまいか。上記の思想史の巨人たちは、広汎な問題を論じたことだけをもって抜きんでているのではなく、広汎な問題関心を喚起する示唆と深度を含んでいたことにおいて卓越していた。

加藤の場合も、ご寄稿いただいた論稿には国境と専門領域間、世代間の差を越えた普遍的な問いが開示され、考究されていることにそれは示されている。一例をあげれば、丸山や加藤に対してのセイやヲリ子の存在が、両者に対しては「母的なるもの」「女性的なるもの」の影響という関心をもって取り上げられていることは、そこに着眼した執筆者の力量もさることながら、やはり両者の思想と人格がそれを受肉化する深度を備えていたがゆえであろう。もちろんそこに、未公開のアーカイブ資料の丹念な翻刻によって得られた最新の知見が寄与していることは明白である。

思想史の解読に唯一の正解はない。ただ有意味な読み方、生産的な読

み方というのは存在する。そうした読みは、時代や分野のみならず、筆者の意図さえもこえて受け手の感性の次元にまで刺さる穿孔力を備えている。卓越した思想には、普遍に連なる鉱脈が内包されている。それを掘り下げることによってわれわれは思想の底力に陶酔する。その陶酔こそ思想史研究の醍醐味である。

本報告書がそうした陶酔の舞台でありつづけることを祈りながら、第0号を世に送りたい。

読者諸賢の旺盛な批判と提言を切に期待する。

（おぜき もとあき　加藤周一現代思想研究副センター長）

編集後記

加藤周一現代思想研究センターは 2015 年に発足した。2016 年の加藤周一文庫開設以降、センターの業績や、開催した講演会・研究会などをまとめた冊子の刊行を希望していたが、資金や人員が不足し、かなわなかった。しかし 2022 年度、センターは立命館大学の新たな支援制度「グラスルーツ実践支援制度」に採択され、この度「準備号」の刊行が実現した。白い帆をはったばかりの「準備号」に寄稿してくださった方々に心から御礼申し上げたい。(H)

ようやく漕ぎ出した「準備号」によって、研究センターは小さいが新たな一歩を踏み出した。加藤周一の愛した『論語』には「学問はまた地面の凹みを埋めるようなものだ。簀に一杯の土をほうりこんで埋めただけでも、一歩進めば、その人一歩だけの進歩があったのだ」(子罕第 9、宮崎市定訳)という一節がある。研究センターもこれにならい、土を一杯一杯、運ぶように着実に刊行を積み重ね、いずれそれが一筋の道となるよう努力を続けたい。(F)

女優のブリジット・バルドーは、大事なのは「どの道を選ぶかより、選んだ道をどう生きるかよ」といった。私たちはさまざまな制約条件のなかで現実を生きる。制約条件のない夢物語を思い描いて、現実のあれはダメ、これはダメといっても始まらない。それより目の前の人間の可能性を信じたい。研究センターに集う人たち、関心を抱いてくださる人たち――、そういう人たちの可能性に賭ける。そこから「自由への道」の一歩を踏み出したい。(W)

編集担当　鷲巣　力　半田　侑子　福井　優
加藤周一現代思想研究センター運営委員会

加藤周一現代思想研究センター報告　準備号

2023 年 3 月 6 日印刷
2023 年 3 月 15 日発行
編集発行　立命館大学加藤周一現代思想研究センター
センター長　加國尚志
京都市北区等持院北町 56-1
印　刷　株式会社北斗プリント社
京都市左京区下鴨高木町 38-2

No. 0

March 2023

THE BULLETIN OF THE RESEARCH CENTER FOR SHUICHI KATO AND THE JAPANESE CONTEMPORARY THOUGHTS

RESEARCH CENTER FOR SHUICHI KATO AND THE JAPANESE CONTEMPORARY THOUGHTS

Ritsumeikan University